

# 遁

第5号  
(98.10.25発行)

## 通信

## 生レコード

text.the World of TONSEI RECORDS  
(<http://www.t3.rim.or.jp/~kakou/index.htm>)  
遁生レコード  
352-0002 新座市東1-12-18(アダチ)



プラン at Fandango 980621  
(遁-11)98.8.発表  
遁生レコード1年2ヶ月ぶりの  
リリースは、プラン98年6月大  
阪十三Fandangoでのライブ音  
源。充実の演奏から4曲収録。リ  
アレンジされた「君をさらっ  
て」、音源としては初収録となる  
「夢うつつ」「Lorca(仮題)」など。  
(無料配布)

### 【目次】

リリース情報	1
プラン大阪訪問記	1
レコ評	5
「トレモロ家族」平田徳	10
「結局80's」栗原徹二	12
俺雑記	14
「The Beach Boysを大いに語る」浜尾六郎	17
対談・ロックヨタ話	20

### 【リリース情報】



プラン(当時/遁生)収録  
phycodelic sampler/  
あぶない音楽  
(gyuune cassetteCD95-13)  
98.5.25発表/税別¥2,500  
プラン(ex.遁生)、97年大  
阪遠征時レコーディング音  
源より「自爆」を収録。

ギューンカセットで年一回製作しているサイケオ  
ムニバス。

<他収録バンド>奇島残月と無礼人(オタセクス  
アリスのg、伊藤氏のソロユニット)/シノワ/  
Mady Gula Blue Heaven/Rare Phychedelic Off  
(Labcryのミサワ氏の別ユニット)/タバタミツル  
(ゼニゲバのgのソロ)/サイケデリックジャン  
パー/ゾノ/ずこうびじもく/アンティーク  
フォークロア/オタ・セクスアリス

\*入手方法

大阪 ~キングコング、FOREVER RECORDS 梅田

東京 ~フジヤマ、ディスク・ユニオン、

モダンミュージック、ワールドディスク

以上の店頭では確実に入手出来る模様。

ギューンカセットへ直接通信販売を希望される方  
は[http://www.threeweb.ad.jp/~minor/gyuune/  
order.htm](http://www.threeweb.ad.jp/~minor/gyuune/order.htm)こちらをご覧ください。

《収録曲》自爆(97.6.録音)



可幸月貝「可幸月貝」

(遁-6)96.3.発表  
満を持して発表された可幸月貝  
のアルバム。全編、湿り気と歪ん  
だ映像に包まれている。超私的  
な歌詞と音世界。人はこの暗く  
静かな海に包まれて、ゆっくり  
と沈んでいく。「夢」はプランの  
カバー。遁生レコード全作品中、

最も多くプレスされている。名盤。  
《収録曲》夢/blue sunday/胎内カラ  
出スルコトノ悩ミ/僕八狂ッテナンカイナイ/君

遁生レコードのタイトルは全て無料配布して  
おります。音源御希望の方は遁生レコード宛に送  
料分の切手(1タイトル160円)を貼った返信用  
封筒をお送り願います。

### 【プラン大阪訪問記】

98.6.20. ~ 22.

(98.6.24記)

メンバーチェンジ、改名後初、1年ぶり2度目の  
大阪遠征であった。またもとてつもない充実感と  
幸福感でいっぱいである。

それにしても大阪人、京都人のあの人柄の素晴ら  
しさって一体何なんだろう。「東京でめちゃく  
ちゃ人気のあるバンドだと勘違いされてるんじや  
なかろうか。大したバンドじゃないとわかった途  
端にそっぽ向かれてしまうんじゃないか」な  
どと怖くなったことが何度あったことか。  
いやいやいや、人間って本当はあああるべきなん  
だろうな。ついそんなことを考えてしまう自分の  
汚らしさに反省しつつ、大阪から戻った今も何だ  
か心の膿を流していただいたようでとても気分が  
良い。

終了後、即東京直行という昨年の強行スケジュー

ルを止め、ライブ前日朝いちで大阪入り、ライブの翌日の夜東京へという余裕たっぷりのスケジュール。しかも今回は往復飛行機での移動であった。ぱっとひと飛びたったの1時間、旅費は夜行バスを使った前回の1泊遠征とほとんど変わらず。・・・何で去年もそうしなかったんだろ。

今回の遠征メンバーは、ブランの3人(オカモト、高橋、アダチ)、前Drの高橋(あ)、そして共通の知人である金、安の総勢6人。  
6/20(土)羽田を7時半に発ち、9時前に大阪入り。すかさず売店で「びあ 関西版」を購入。・・・お、載ってる載ってる。・・・ちと待て「ブラン」って何だよ。・・・まあいいんだけどさ。

初日は特に予定もなく観光に集中。そのまま京都へ。  
祇園の町を散策。石畳の趣ある通りに心込む。円山公園にてほっと一息ならめポーっと一息。ついさっきまで東京にいて日々あくせくピリピリしていたことが信じられない。何もしない幸せってのもあるんだな。

飯も食わず夜7時、ギューンのスハラさんにご挨拶へ伺おうと心齋橋のスタジオ・パズルへ。一年ぶりの再会。我々一同をあの笑顔で暖かく迎えてくれる。  
別行動を取っていたブラン高橋ともここで合流、しばし談笑。笑い過ぎで頬骨が痛い。ああ、この感覚も1年ぶり。こんなに笑ったのは久しぶりである。

今回リリースされたブラン収録のギューンカセット・サイケオムニバス「あぶない音楽」は売り上げが好調らしく、ライブ会場で販売する数十枚をのぞいて在庫無しという状況だとか、  
「500枚じゃ足らんねえ」とスハラさん。

いやいや正直不安だった。いくらギューンのネームバリューがあるとはいえ、自分らの曲が収録されたCDが500人もの人々にホントに行き渡るんだろうか、ギューンの失敗作になってしまたらどうしようと思っていた。別に私の財布が痛むわけではないのだけれど、売れなかったら、2度とギューンからの我々のリリースは無いらうなとまで考えていた。

先月末に新宿の某CD店で10枚の入荷を確認し、その一週間後、在庫が2枚になっていた時も「売れてるなあ」の喜び半分、「返品されたんかなあ」の疑い半分であった。いやいやどうやら素直に喜んでいらしい。でもそもそも我々単独の音源ではないわけで、そんな心配は最初からいらなかったわけで、他に関西の有名どころが参加しているわけで、そもそもウチ目当てで買う奴はいな

いわけで。お目当てのバンドがあって、ついでに我々を気に入ってくれたら儲けもの。何はともあれ売れてて良かった。

そしてまたまたスハラさんからうれしいお知らせ。このCDからウチの音源がFM長崎でオンエアされたそう。ある番組の「あぶない音楽」(CDのタイトルとは無関係だそう)という特集の中でサニーディ・サービスに続いて「自爆」が流されたそう。何の曲かは知らんがサニーディの作品の後に「お前え～の～正義とやらは～オレを粉々にした～」とやられては長崎県の方々もさぞかしたまらなかったことだろう。

そんなこんなで数時間。笑いすぎで頬骨はすっかり筋肉痛。時間も時間であったのでパズルをおいとますること。

(今回初めてお会いした郡さん、昨年レコーディングでお世話になった森本さん、ありがとうございました。スハラさんは絶対パズルの従業員を人物の面白さで採用しているに違いない。昨年パズルでお会いしたマディグラのcottonさんは別バンドでフランスツアー中でお会いできなかったことを残念に思います)

外に出てふと気づく。朝から何も食べていない。京都観光とスハラさんとの再会の喜びで精神状態がかなり高ぶっていたとはいえ、さすがに腹が減った。

アダチ、ブラン高橋、高橋(あ)は周辺で食事を、残る3人はTVでサッカー観戦がしたいということで、パズル前で別れる。食事組、ご迷惑かとは思いつつスハラさんを食事にお誘いする。「ええよ」とすぐさまやってきていただく。本当はどうやらこの日、羅針盤のレコーディングがあったらしく、我々なんぞに付き合っている場合はなかったらしいのだが

「こうなるのはわかっとったから」と一言。・・・何ていい人なんだ。

スハラ「何食べたい？」

ア高高「お好み焼き！」

一同、スハラさんの車へ乗り込み梅田のおすすめの店へ。

う、うまい・・・。極度の空腹状態と云うことを差し引いても本当においしかった。店の名前を控えるのを忘れてしまい、ご紹介出来ないのが残念であるが、それでも気になる方がいらっしまったとしてもギューンカセットの方に「ブランと行ったお好み焼き屋は？」などと問い合わせたりはしないように。

今度は酒が入り(スハラ氏は運転があるため烏龍茶。念のため)、またもしばし談笑。頬骨イテテ。

店を出て酔った勢いで商店街の真ん中で記念撮影、

宿泊先までお送りいただきそのままベッドへ倒れる。就寝深夜1時。ああ、来て良かった・・・。

2日目。

遊んでばかりもいられない。今回回のために呼んでいただいたかと言えば、良い演奏をするため。朝9時に一同ロビーに集合、再び心齋橋へ。プランはパズルでリハーサル、他は神戸へ観光。慣れないスタジオで勝手に分からず戸惑うが、細かいことは気にせず演奏曲目の確認程度にとどめる。寝起きの練習は声が出ない、身体が動かん。

練習終了後、パズルでスハラさんを待つ。ジャンケンで負けた私がアメリカ村名物甲賀風たこ焼きを買いに行く。ここに来たらやはりこれを食べなくてはいけない。・・・やはりうまい。柔らかいのに粉っぽさが全くない。東京にもうまいとされるたこ焼きや数あれどこのおいしさには出会ったことはない。何故これが作れないんだろ。昨年以來、東京でたこ焼きを食べたことはなかったし、食べたいとも思わなかった。一度これ食べたら誰もがそう思うことだろう。大阪人がお好み焼きやたこ焼きでご飯を食べれるというのは、不思議でも何でもない。ちなみにこの店はアメリカ村の三角公園そばにある。是非一度ご賞味あれ。

スハラさんまだ来ず。

楽器をパズルに預け、アダチ、オカモトしばシアメ村を散策。2着1,900円Tシャツ購入後、レコード店「Time Bomb」へ。入り口でファンダンゴの6月出演予定表を発見。すかさず10枚ゲット。・・・お、載ってる載ってる。・・・よし、今度はちゃんと「プラン」だ。つかちゃんと書いてあって当たり前なんだけどな。・・・ちと待て「ex. トンセ」って何だよ。・・・まあいいんだけどさ。

気を取り直してレコード漁り。BB5「Holland」英国1stプレスアナログを発見。しかも珍しいシングル付きのやつ。しばし悩むが今日は1日楽器持参の大荷物、値段も値段のものなのでこの日は保留、次の日もう一度やってくることにする。

パズルに戻るとスハラさん到着済みでプラン高橋と談笑中。暑いので早速買ったTシャツに着替える。一同に「似合わん」と不評。大きなお世話である。以前共演したスパローズ・スクーターの黒瀬さんと再会(確かにカール・ウィルソンに似ている・・・)、冨タセクの時原さんと初対面でご挨拶。

時間も差し迫り、プラン、スハラさんの車に乗り込み十三ファンダンゴ入り。ああ、1年前。同じ時期に大阪入りしていたキリ

ヒトを観に足を運び、その雰囲気の良いさに「いつかここで演奏してみたい、いや演るのだ」と誓ってから、それがこんなに早く実現することになるうとは。感慨ひとしお。スハラさんへの感謝の気持ちを新たにする。いやいや我々が良い演奏をし続けて努力してきたからだなどと思いたくともやはりスハラさんの力無くしては実現しなかっただろう。

プランの出演は4バンド中3番目と告げられる。トリを務めるアンティーク・フォークロアから四番の逆の順番でリハーサルが進められる。リハーサルでは丁寧にかなり理想的な形を作り上げることが出来た。今回は不思議と緊張が少ない。一方、普段あがるということが無いオカモトが緊張しまくっている。珍しいこともあるものだ。どうしたものか。

リハを終え、一通り他のバンドの出方を確認し、3人、十三の町へ。外は生憎の大雨。商店街のアーケードをあても無くブラブラ。「緊張ほぐしに1杯だけ」と安そうな居酒屋へ。サワー1杯とつまみ1品ずつ注文。オカモト氏おとなしい。・・・おかしい、大丈夫か？

また、3人薬局でドリンク剤を購入。私はマムシドリンクを。これを出番前に飲めば準備万端。やはりロックにドラッグは付き物である。

ファンダンゴに戻るに既に開場済み。大雨に関わらずなかなかの入り。元フォークロアの金森さんと1年ぶりの再会。ああ、あの笑顔。何度か手紙のやりとりをさせていただいたので1年ぶりという気がしない。「いやいや私は1年ぶりって感じですよ」と金森さん。・・・いい人だ。そして今回同じアルバムに収録のシノワの平田さんと初対面。メールでのおつき合いはあったもののこうして直接お会いすると照れるものです。

それにしても何でこんなに皆さん暖かく迎えてくれるのだろう。別に東京で大人気のバンドでもなんでもないんですよ。いきなり感激モードに入る。・・・幸せ、ホントに幸せだ。

高橋(あ)、金、安も神戸観光から戻り会場入り。・・・しかし東京で演るよりお客さんが多いってのはどういうことなんだ。基本的に大阪のライブハウスにはノルマ制度というものが無い。しかもライブハウスがある種サークルのたまり場の機能を果たしているようでお客さん側にも「何やっとなか知らんが、ファンダンゴ行ってみよか」という感覚がある。内輪のりになってしまう部分があって良くないという方もいらっしやしたが、大阪人はつまらないバンドには

露骨にそっぽを向いたりするらしいので内輪どころかそれこそ健全な音楽シーンなのではないかと思う。よほど人気のあるバンドでない限り、ノルマ制度によって縛られて、来るお客さんと云えば義理堅い友人がほとんど、しかも友人のバンドを観たら帰ってしまうという東京の状況とは大違いである(高円寺20000Vにはノルマ制度はあるものの大阪のライブハウスに比較的近い雰囲気がある。それでも時々「ライブ活動を続ける意味とは・・・」などと考え込んでしまうが・・・)。まあとにかく、東京では20000Vでやればそれでいいという思いを新たにした)。それにしてもそんな状況では育つバンドも育たない。

予定より15分ほど遅れ、7時15分「あぶない音楽」発売記念ライブついに開演。

トップは京都のずこうびもく。今回のCDのジャケットではメンバーが5, 6人位写っていたが、いつの間に3人になってしまったらしい。唄/G、G、Drという編成。

ギャラクシー500から狂気を引いたようなサウンドと文学的の歌詞がとても気持ちいい。うっとりやさしい気分になった。特に後半の「コスモス」が印象的。抽象的な描写が続いた後の「君のコスモスは強い」の断定形のリフレインには参った。いきなり涙がこみ上げて来た。おいおい、しょっぱなから泣いててどうする。

続いて登場はオタ・セクスアリス。

何て表現したらいいんだろ。歌謡サイケロックか。1曲1曲が耳にこびりついてくるようだ。さっきりハで数曲聴いただけなのにもう憶えてしまっている。

フロイド「See Emily Play」のカバー「かのじょ～はど～こへ～シ～エミリプレ～」にはヤラレタ。歌謡とロックが交差する。・・・いいバンドだ。かっこええ。

オタセクも残り数曲となり、いよいよ出番が近づいてくる。自ずと緊張が高まるが、それほどでもない。酒が入ってはいるがとても冷静だ。ママシドリンクも良い方に作用してくれたようだ。

楽屋へ戻るとオカモトが黙々とスティックの素振りをしているのか。こんな姿を見るのは初めてだ。あがっているのか。

「素振りしてたら落ちてきた」の言葉に一安心。

ブラン高橋は「緊張する緊張する」を連発。でもこいつのステージ度胸はかなりのもの。大丈夫だろ。

オタセク演奏終了。いよいよ出番、さぁ行くぜ。演奏曲目は以下の通り。

- ・オレハ員二ナル
- ・夢うつつ
- ・夢
- ・月光
- ・硬直
- ・炎
- ・君をさらって
- ・Lorca(仮題)

あつという間だった。というか頭の中が空っぽ。「うつつ」の後に珍しくMCをやってみたが(それにしても大阪のバンドはしゃべりがうまい)一体何をしゃべったものか。

録音テープを聴く限り、悪くない演奏だったと思う。

ブランとなってからちょうど1年。バタバタしつつも何とかここまでたどり着いた。満足と云っても良いかもしれない。気になったことといえば誰かがステージ横に置いたスネアが我々の演奏中、振動しまくっていたことぐらいか。全体を通しては問題なかったが、極端に静かな曲「夢」の演奏時には正直気になった。「常識知らず」と怒ってもよいが、まあよしとしよう。

・・・終わった。

楽屋へ向かうとスハラさんがいつもの笑顔で迎えてくれた。「よかったよ」その一言で十分。・・・来て良かった。幸せだ。

汗だくになった服を着替え、会場へ戻る。演奏も終わり、あとは楽しむのみ。

トリはアンティーク・フォークロア。とんでもないキャリアの持ち主だ。

今年4月頃のフリーボとの共演ライブに足を運んだオカモトに「日本であんなブリティッシュ・フォークの音出してるバンド初めて観た」と云わしめた。今回のアルバムの音源も素晴らしかった。途中ギター弦が切れるというアクシデントがあったが、圧倒的な存在感。共演出来て光栄です。

夜10時半、ライブ終了。さぁ今度は飲みまくるのみ。

会場で金森さん、平田さんと会話。ずこうびもくの三木さんが「ブランはんよかったですわ」とご挨拶。おっとりしたとてもいい方。三木さんは2年ほど前に我々(当時 遁生)が高円寺20000Vでギューンの企画に出演した際、スパローズ・スクーターに同行してやって来ていたそうだ。「観るの2回目なんですわ」・・・いい方だ。

スハラさん「いい企画だった」を連発。その言葉、何よりうれしかった。企画に傷をつけることにはならなかったようだ。本当に楽しかった。

ずこうびじもく、平田さん京都組とお別れし、隣の焼き肉やへ打ち上げにだれ込む。

「さぁみんなテーブルの上に2,000円ずつ出して」と店のおはんの一言。先にお金を払ってその分の飲み物、肉が出てくるシステムらしい。しかしたった2,000円で大丈夫なかな。

・・・うわ、食いきれん。大皿に肉、キムチ、野菜と続々出てくる。そしてうまい。アンティーク・フォークロアのメンバーは酒乱だという噂を聞いていて、最初少しビビっていたが、決してそんなことはなかった。ブラン高橋の「ウチにも酒乱がいるから大丈夫」って誰のことだ。Gのサンカイさんと会話。すげえいい方。

voのサンカイさん(ご夫婦でいらっしゃる)はお仕事の都合でちょうど我々が演奏中に会場入りしたそうで、「東京のバンドもう終わったものだと思っで、まさかこんな濃い〜バンドがそうだとは思わなかった」とおっしゃっていた。「東京のバンドは薄いばかり」とおっしゃっていたのでこれを最高の褒め言葉と受け止める。

冨タセク時原さん、カメラマンのトンデンさんとも会話。トンデンさんはありじごくのメンバーでもあり、演奏中に書道をし、次々天井からぶら下げていくそう。メンバー一覧に「vo. 誰それ g. 某 書道・・・トンデン」とこられたらたまらんな。

そんなこんなで深夜12時を回る。打ち上げもお開きに。腹一杯。楽しかった。

いよいよ皆さんともお別れ。

スハラさんまたは「ホントいい企画だった」・・・はい、本当に。ここに居たことを幸せに思います。

我々「ありがとうございました」と頭を下げる。「また絶対呼ぶよ」とスハラさん。「絶対」だ何て・・・我々は精進を続けなければならない。そうすればきっとまた大阪に呼んでいただけるだろう。大阪で演奏するために音楽をやっているわけでは決まてないが、我々の音楽に魅力があってこそ、このようにたくさんの人々との交流ができるのだ。

音楽を続けてきて本当に良かった。

スハラさんをはじめ大阪皆さん、本当にお世話になりました。ホントにホントに楽しかったです。幸せすぎて東京に戻るとしばらく「大阪ブルー」に陥ります。去年もひどかったが、今年もダメだろうな。

そんなわけで我々一行は、次の日てんでバラバラでおのおの大阪観光をし(BB5「Holland」はもちろんゲット)、夜9時に東京へ戻った。

・・・疲れた。楽しかった。幸せ者です。

ポ・・・

## 【レコ評】



ブラン クロスレビュー  
小島麻由美/さよならセシル  
(PCCA-01206)

さらに濃厚になってしまった。フリーボの石垣君(1)によると、このアルバムのレコーディングはかなり大変だったらしいが、さもありません。

この人がやるようとしている事は基本的に1stアルバムから何も変わっていない。ただ、それを表現する手段が備わってきたのか、興行きが深くなっただけなのだろう。僕は2ndの時点でほぼ完成されているかと思いついて入っていたが、とんでもない思い違いだった。

気付かなかっただけなのかも知れないが、1stアルバムである「セシルのブルース」の頃は、まだその「セシル」に何かしらのイメージは掴みにくかった。それがこの「さよならセシル」において、小島の「セシル」ははっきりとその姿を現した。(と思う)

サガンが18才の時に書いた処女作「悲しみよこんにちは」の主人公の名前が確かセシルだったが、小島の「セシル」はサガンとは必ずしもイコールではない様で、大人ではなく子供でもない、微妙なところを歩いているアナーキーで危ない時期の女の子の象徴みたいなものが小島の「セシル」像であり、「セシル」を描いたこのアルバムは小島による「仮面の告白」なんじゃないだろうか。何故そう思ったのか細かく書いてみようと思ったが、ムリだった。

以前からめちゃうくちゃうまかったヴォーカルはさらに自由になり、もう何歳の女が唄っているのかもわからない。前作の時点でもその兆しはあったが、娼婦か女優の作ったアルバムかと思ってしまう。全盛期のデヴィッド・ボウイを聴いていると美しい映画を観ている様な気がしたが、今の小島麻由美もちょうどそんな感じなのかも知れない。見てはいけないものを盗み見しているような感覚もあって、歌だけ聴いても泣けてくる。

また、アレンジも含めたバックの演奏も前作の路線を踏襲しつつasa-changなども加わって、さらに深みを増しており、シングルカットされた「セシルカットブルース」はジャズやR & Bからシャンソンまでを飲み込んだムード歌謡といった雰囲気、70年代日活映画のサントラ(2)の様でもある。ちなみにこの曲や最後の曲の歌詞はゲン

スプールが何も知らないフランスギャルに唄わせ  
た「アニーとボンボン」みたいなもんで、それを  
自分で作って自分で唄っているんだからどうにも  
ならん。

全作詞、作曲、編曲にプロデュースも全曲を小島  
が全て手掛けてしまった。これ以上何があるんだ  
ろう。

裏ジャケットには小さく“Adieu”と書いてあった。セ  
シルの季節に別れを告げた小島が次作をリリース  
することはあるのだろうか。それとも、第1期の  
小島麻由美はこのアルバムで終わり、次作から第  
2期が始まるのだろうか。多分、後者だろう。

もし、次作で小島が美輪明宏から松田聖子になっ  
ていたとしても、僕は絶対聴いてみたい。

( 1 ) 9月にリリースされるフリーボの新作  
を手掛けたレコーディングエンジニアはフリー  
ボの前に「さよならセシル」を手掛けていたら  
しい。

( 2 ) 70年代日本映画のコンピレーション  
盤「ワイルドサイケを歩け」参照。

98.6.17 (オカモト)

新作を待ち遠しく思う数少ないアーティストのひ  
とりである。

初のセルフプロデュース作となる今回のアルバム  
は、他者が介入しなくなった分、本人の人間性が  
むき出しとなったドロツとした感触があったり、  
1st時のロリポップ的楽曲が再び登場したりと小島  
麻由美集大成といった趣がある。

小島麻由美は、既に完成された音を持って登場し  
たと云って良いだろう。今作でも基本的な音楽性  
にはほとんど変化がない。この辺りのことはオカ  
モト氏が言及してくれるだろうから詳しくは触れ  
ないが、多分これしか出来ない人なんだろうな、飽  
くまで褒め言葉として。実際これしかやらないで  
欲しいんだけど。

なのに何故新しい作品を発表する毎に私に新鮮な  
刺激を与えてくれものかと云えば、それはひとえ  
に彼女の唄声と唄われる言葉の変化故なのだと思  
う。

1st「セシルのブルース」で恋愛へのあこがれ、2nd  
「二十歳の恋」で恋愛の喜びを唄い、そして今作で  
は汚らしさや幻滅をも含めた恋愛や結婚の本質、  
他者と他者との誤の分らないつながりを……  
多少極端な分け方であるのは重々承知であるが、  
アルバム毎に変化するひとりの少女の物語に一緒  
になって喜んだり、悲しい気持ちになったり、い  
つも彼女の世界に引きずり込まれ夢中になってし  
まう。

前作のレビューの中で私は、彼女の魅力は語尾の  
息継ぎにあると述べた。そこには彼女が言葉に託  
した感情が最も色濃く表現されており、それが私  
の心を動かす。

そもそも言葉などというものは数十の音の組み合  
わせによる記号にしか過ぎない。この記号に対す  
る共通のルールを他者との間に持ち、発する側が  
そこに意志や感情を込めるからこそ初めて言葉が  
他者へと伝わるのである。

言葉には魂がある。魂のない言葉など記号に過ぎ  
ないのだ。

言葉の魂を重んじた作家に泉鏡花がいる。彼は原  
稿執筆中にふと忘れてしまった文字があると奥さん  
に訊ね、空中に指でその文字を書いてもらったと  
いう。そしてその文字を思い出すとすぐに「消し  
なさい」と云って空中を振り払ったそうだ。空中  
に書かれた文字をそのままにしていると言葉の魂  
が化けると信じていたからだ。事実「言霊」とい  
う語もある。

唄だって同じである。

言葉に魂の込められていない唄は「単に連続する  
音階の上に記号が乗った音のかたまり」に過ぎない。  
そんなもの聴いたって何も伝わってこない。そ  
ういう唄がいかにも多いことよ。

唄における言葉が音階という制限を受ける以上、  
そこに意志や感情を込めることは、同じことを口  
にして話す以上に難しいはずだ。

小島麻由美は単なる記号を言葉へと昇華し唄とす  
ることが出来る希有な存在である。

私は小島麻由美を全肯定する。

98.6.17. (アダチ)



ブラン クロスレビュー

Syd Barrett/The Madcap Laughs  
(HARVEST SHVL 765/日TOCP-3430)

「あれからシドは母ちゃんと一  
緒にテレビを見て暮らしてい  
る」

嘘かホントか知らないが、学生時代にこの話を友  
人から聞かされて以来、私がシドを思う時、決まっ  
てその映像が浮かんでくる。

何だかあったかで穏やかそうだ。詰まるところ、音  
楽なんかで自分を突き詰めてもろくなことがない  
ってことなんだろうな。

最近シドの母親が亡くなり、シド自身も糖尿病で  
精神的にも肉体的にもかなりヤバい状態だとい  
うことを知った。音楽界から姿を消してもう20年以  
上も経つ人物であるのに、このいても立ってもい

られない気持ちは何なんだろう。別に新しい音源など期待してはいないのだけれど、あなたにはそこにいてほしい。

それがファンの戯言だってこともわかっている。ロジャーが何かのインタビューでフロイドの歴史を振り返った際に

「ロックの歴史においてヤツは必要なのかもしれないが我々には他人が云うほどの重要性はなかった」というようなことを云っていた。もちろんシドがフロイドの創設者でありバンドの全ての曲を書いていたというのを前提であるが、ある時期からシドはフロイドにとどめておかないお荷物になってしまったんだろう。だからクビにした。そしてバンドは何十年も生きながらえた。・・・それが正しかったかはさておき。

我々は音楽や文学や絵画に常人には見えない世界を求め、感動を得る。シドが狂気のフロイドであるならロジャーは理性のフロイド・・・自分に見えない世界を見ることのできる人物がメンバーにいたということはロジャーにとって嫉妬の対象であり脅威であったことだろう。たったの2枚しかないソロアルバムを聴く限りではあるが、シドの音楽に向かう姿勢はとても自然体でも云おうか、簡単にスーッと唄が出てきた、そんな感じを受ける。

一方ロジャーがフロイドで作上げた音楽は試行錯誤を経て内面から絞り出した、もしくはひとつひとつ構築して行ったという印象がある。クビにはほとんどのロジャーにとってフロイドの歴史とは、ほとんど勝ち目のないシドとの戦いであったはずだ。だからこそ彼はもがき苦しんで、その結果優れた作品を残すことが出来たと云って良いかもしれない。

今だ現存するバンドである。その歴史をきちんと総括されることはまだ少ないし、それでも最近では、1stのフロイドは別物であると語る向きもあつたりする。数年前に出たフロイドBOXではシド在籍時の1stだけが省かれていたし・・・。ロジャーはついに戦いに勝ったのだろうか。そしてフロイドの看板を捨てた彼は楽になったのだろうか。

「The Madcap Laughs」は'70年1月に発表されたシドの1stアルバムである。

お薬による精神破綻の末、バンドを追い出されたのが'68年3月。その2ヶ月後には既にこのアルバムに向けてデモ製作を開始していたそう。フロイド脱退直後やこのアルバムの発表当時のシドの発言を読む限り、失望や混乱など微塵も感じられず、新しい音楽活動への希望や自信など前向きな発言ばかりであることに驚く。失望や混乱などし

ている暇などないほどシドの心は音楽へと向かっていたのだと思う。それともただ単におかしくなっていただけなのかもしれない・・・。

その10ヶ月後には2nd「Barrett」を発表、'72年にはバンドを結成し数回のライブをこなしている。だがしかし、そこでシドの音楽活動は途絶えてしまう。

確かにシドのドラッグ依存は重大で、それ故の結果であることは間違いない。だが一方でシドをそこに居させまいとする働きがあったのではないかと疑う自分もいる。

音楽とは極個人的なところから発せられるものである。たがそれを完成形として提示するためには複数の他者を介し共に作り上げていくという課程を経ることが多い。それが良い化学反応をもたらすこともあれば、人間関係の摩擦を引き起こすこともある。

狂気のパンマスに「いち抜けた。に抜けた」・・・そしてシドが残った。そんな想像をするのは私だけだろうか。

このアルバムを発表した当時シドは音楽業界について聞かれこう答えている。

「ここは美しいところだよ。僕はもうどこへも行きたいとは思わないね」

フロイド時代の空間を音で塗る「ペインテッド・サウンド」とはうって変わり、ここでの音世界は極めてシンプルなものであり、シドのギターと唄に簡単なバンドサウンドが絡むといった趣。

その音像はムククの作品のように不安に美しく歪んでいる。ポーっとしているとの心の中に入り込んでどこかへ持って行かれてしまう。

この文章を書くために酒を片手に数時間このアルバムに私は向かい合った。こんなにゆっくり聴くのは久しぶりである。酒が次々と進み、何度も何度もこのアルバムを繰り返した。気が付くと目を閉じていたが眠っているわけではなかった。シドの音楽が右へ左へとグラグラ揺れる。目を開けると間違いなくいつもの部屋であるのだけれど、何だかふわふわした不思議な場所だった。単に酔っているだけなのだろうか。それにしても気持ちよい。私はそのまま身を任せた。

・・・いつの間にか眠ってしまったんだろうか。夢の中では、シドの聴いたこともないような曲がいつまでもいつまでも鳴っていた。

そんな風にして朝目覚めた。いつもの朝だった。私は一体シドにどこに連れて行かれたんだろうか。

・・・客観的批評など無理です。

最後に。

今回のリイシューで収録されたボーナストラック、

3タイトルで全19曲。収録曲のデモバージョンやレコーディングのアウトテイクであるで未発表曲は無し。

コレ目当てですべのアルバムを買い直しておいて何だが、いくらCDが74分入っていったって、こう何でもかんでもボーナストラックとして収録するのはどうなんかなという気もする。確かにシドの作曲風景の秘密をかいま見れてワクワクするのは確かではあるが、何だかこれって墓暴きじゃねえのかなあって気もしないわけではない。シドに「コレ入れますよ」って許可など取ってないだろうし。

それにアルバムとは飽くまで十数曲で完結する作品なわけで、一度完結したあとにすかさずおまけの音楽が流れ出すってのは、アルバムの感動を薄めてしまうことになりかねないんじゃないだろうか。

でもそんなおまけがうれしかったりもして、矛盾しているわけですが。

せめてCDシングルで別個おまけを付けてくれるとか気を使ってみてもいいんじゃないだろうか。

コストが割高になるからレコード会社は嫌がるんだろうけど、価格が1.5倍でも買う人は買いますぜ。

でもなあ、本来買うべきはずじゃない人も買ってこそ儲かるのが音楽業界なんだろうな。

やっぱわがままか。

98.8.17. (アダ)

あまりにも好きだったため、聴けなくなっていたらイヤだなあ、と思いつつ、ずいぶんと久しぶりに聴いてみたら、何にも変わっていなかった(しかし、涙なくしては聴けん)。

“Terrapin”のうんざりして臉が重くなる様な気持ちよさも、“No Good Trying”の1つ1つ関節がはずされていく様なかつよさも、その印象は全く変わっていない。別に詭弁を弄している訳ではない。実際そんな感じなのである。

僕はPINK FLOYD(以下FLOYDと略)の1st.よりもSYDのソロを先に聴いてしまったためか、FLOYD自体は嫌いじゃないけどそんなに好きでもない。確かにどちらもSYDの作品であり、独特の歌詞、特に言葉と言葉のつながりや、それに付随したフレーズ、コンポジション等に関しては、どちらにも共通した要素が見られるが(蛇足だが、この歌詞に関しては日本のハードコアパンクバンド「あぶらだこ」に近い感触を憶える)、それでも決定的に違うものがある。

それはFLOYDはバンドサウンドで、ソロの方はアコースティック中心の音作りだとか、そんな表面的なことではなく、ソロアルバムにおけるSYDは空っぽだということである。スピーカーから流れ

る、密接に結びついた音と言葉以外には、思想や時代背景やミュージシャンの意志、音楽的バックグラウンド等といったものが何も見えないのだ。勿論SYDにもFLOYDでのデビュー前は、当時のイギリスのミュージシャンとしてご多分に漏れずブルースやR & Bを志向していた時期があった様だが(実際、FLOYDの1st.ではそういったものが垣間見える)、このアルバムでは表面から根っこ部分を覗いてみても下敷きになっている様なものが何も見えない。マジで空っぽなのだ。優れてサイケデリックだが、手法としてはよくある様な(FLOYDの1st.も例外ではない)ブルースを根底にしたインプロヴィゼーションからくる昂揚感を基にしたサイケではなく、また、テープのループや逆回転といったスタジオテクニックから生み出されたサウンドでもない。当時彼が大量に服用していたLSDはSYDに何を見せたのか。結果、出来上がった音楽は誰にも真似の仕様がないうる巨大なブラックホールになってしまった。

FLOYDの1st.と“Madcap ~”の間には実際に要した期間とは無関係な次元に於いて遠い隔りがある。その間にSYDは言葉と、ギターの弾き方以外は全て置いてきてしまったかの様な、かくも遠い隔りである。

また、サウンドの面に関して、このアルバムはSYDの歌とギター以外はほとんどオーヴァードブで録られた様だが、そんなことは全くどうでもいいかの様な気持ちいいバックিংがなされた曲もあり、特にソフトマシンの3人が参加したテイクは白眉である。SYDの頭の中で鳴っていた音が果たしてこの音なのかどうかはSYD自身にしかわからないが、こんなに有機的(と言うのかな?)なバンドサウンドはそう簡単には聴けないと思う。MALCOLM JONESのほったらかしプロデュースも素晴らしい。MALCOLMと分担してこのアルバムのプロデュースにあっているDAVID GILMOURのプロデュースワークは(1st.とはアプローチが違うが)その後の2nd.アルバム“BARETT”に於いて実を結んだ。

このアルバムは底なしの井戸であり、出口のない入り口である。

2枚のソロアルバムをレコーディングした後のSYDは「医者になる」という言葉を残してシーンから姿を消し、その後は母親と一緒に生活して、毎日TVを観て過ごしていたというのが、最近になってその母親も亡くなってしまったらしい。

SYDの心痛はいかばかりか。彼の精神に平穏と安息の訪れんことを願わずにはいられない。誰にも邪魔されることなく、心穏やかな日々を送って欲しい。マジで。

98.8.16. (オカモト)





The Zombies/Zombie Heaven  
(Big Beat)

あまりにも素晴らしい。2枚のオリジナルアルバムと未発表曲、BBC セッションのぎっしり詰まった4枚組。音楽に情熱をかたむけることがこども美しいだなんて・・・。奇跡だ。

果たしてゾンビーズは不遇なグループだったのでしょうか。セットはディスク1、彼らのデビュー曲にして最大のヒット「She's Not There」から始まります。英国ではこの後ヒットは続かず、4年のちに解散、その直前米国においてCBSがアル・クーパーのプッシュによってカットした「Time Of The Season」が大ヒット、ようやくバンドに対するリスペクトが起きた頃にはゾンビーズは存在してはいなかったのです。・・・というのが大まかな彼らの足どりであります。そして現在においても、特に英国60年代ビートルグループというくくりからもれそうになるなど評価は今ひとつ、という現状です。

だがそんな心労をよそに、このセットの隅々まで、真に幸福というか喜びというか、よどみというものが全く感じられない空気に満ち満ちているのであります。そうか、これが「天国」というものか。とりあえず、彼らの公式録音だけをとってみても、4年間の短い生涯でシングル・アルバム含めて実に丹念にレコーディングが積み重ねられてきていること、ヒット性うんぬんでなく充実していると思えます。カヴァー曲ではボ・ディドリーやソロモン・パーク、ミラクルズなどのR & Bを取り上げつつも、マニアルズ、ヤードバーズあたりの黒っぽさと一線を画すメロディアスな取り組みようで、そのセンスはよりオリジナル曲で物を言う。三声のコーラス、すましていても尚みずみずしいオルガン、スタンダードからラテンビート、ジャズもいけそうなおいしいリズム隊。良い曲を書き、良い演奏をする、という事がまさに全うされている。看板ボーカリスト、C・プランストーンの力はここにおいて絶大であり、大きな鼻で男前の彼のそよとした、なのに愛を帯びた声は紳士的な情熱を楽曲に注ぎこむ。モッズだったり、黒かったり、ブルースだったりトラッドだったり、パワーポップだったりヒネクレたりしない英国ロックの一断片。

それがゾンビーズ。ビートルズにしても、彼らに追従した輩にしても、自分たちのロックコンボとしてのバンドサウンドを壊体することで新たな音をつくり出そうとした。だがゾンビーズはバンドサウンドにこだわった。しごく当たり前に、自分たちを切磋琢磨していったのである。そりゃアク

は無いけどさ、ハイスクールのパーティバンドがそのままコンテストに優勝したのがスタートだった。でも人生の紆余曲折の前の淡い何年かの、つまり青春の足跡が、これらの楽曲群だなんて・・・うらやましい、じゃなくて素晴らしい。

その「淡い季節」の最終章であるセカンドアルバム「Odessey & Oracle」たまにプログレの祖だなんて言われますが、ロマンチックでエレガントな曲想を豊かなキーボードを軸としたアレンジが導く世界にその雛形が見受けられるからでしょう。特にメロトロン。EMI アビエロードスタジオにてエンジニアもジェフ・エメリックとくればビートルズの恩恵を多分に考えるべきですが、そこで得られる深い音像をバンドの演奏そのものとの合致は強烈なまでにリアルだ(CDリマスターによってさらに鮮明となった)。これをソフトサイケだとかトータルアルバムうんぬんと言ってははいけません。その音に共鳴し、自分を重ね合わせてしまおうと、そういう至上の時には必要のない言葉ですよ。

1つだけ私の至上の時を挙げさせて下さい。「Hung Up On A dream」でのメロトロンとギターがユニゾンするメロディー。あ、あとひとつだけ。「Beachwood Park」のヴィブラート・ギターからむ荘厳なオルガン。それから・・・。

ジム・モリソンもゾンビーズをフェイバリットに挙げていたし、「Light My Fire」などでラテン風リズムとクラシカルなオルガンがからむ様に影響ありあります。プロコル・ハルムやヴァニラ・ファッジといったオルガン・ロックたちはクラシックの構成美とジャズ・インプロビゼーションを大胆に取り入れていきますが、ソウル、ジャズ、ポップの狭間で揺れ続けたゾンビーズの慎ましやかなたたずまいはワン・アンド・オンリーでありました。

実は私、ボックスCDなるものを手に入れるのはこれが初めてなのです。こんなに手入れ込んでしまえるものだと知りませんでした。次はDoors Boxかな・・・。ああ、楽しかった。

(LEE)

< ご案内 >

「通生レコード通信」に掲載されたコンテンツは通レコの擁するもののほんの一部です。是非通生レコード公式サイト「通生レコードの世界」(<http://www.t3.rim.or.jp/~kakou/index.htm>)をご覧ください。所属アーティストの最新情報はもちろん、音楽評、その他膨大な文章量であなたに迫ります。また週に一度E-Mailでお届けするメールマガジン「通レコ通信」も開始いたしました。通レコサイトの最新情報はもちろんウェブでは扱いきれなかったテーマを取り上げます。詳細は通レコサイトをご覧ください。

## 【トレモロ家族】

平田 徳雨(シノフ)

### 第1回/エンジェリンヘヴィ・シロップ体験

「エンジェリン・ヘヴィ・シロップ」(以下、エンジェリン)との出会いは、3.4年前に、関西テレビで深夜放送された、「精神解放ノタメノ音楽」という番組でありました。この番組は、「ハナタラシ」「ポアダムズ」「想い出波止場」「マゾンナ」「非常階段」「ソープ嬢変死」などを取材したものでしたが(当時は今の様にメジャーではなかった)、ここに「エンジェリン」が取り上げられていたのです。ライブのワンショットが放映されたのですが、自分のなかにあった抽象的思考がそのままバンドで表現されていたのです。

官能的、浮遊的、言葉では言い難いVOに、また、同様のギター。そして、「サンデーモーニング」を思わせる鉄琴、日本人の心をくすぐりながらも、得体の知れないメロ、抽象的な歌詞。この衝撃は尋常ではございませんでした。

そして、情報を得、CD「ANGEL' IN HEAVY SYRUP」を購入。これがとんでもないアルバムだったのです。特に、「NAKED SKY HIGH」は、サイケ、プログレ、ユーロロック、日本のロックを止揚して、さらに10段階ぐらい止揚させた名曲です。「ソニー&シェール」の「I GOT YOU BABE」のカバーも秀逸です(すべてが名曲なのですが)。おそらく、『日本ロック&フォークアルバム大全』の1980~1999版が出れば確実に紹介されるでしょう。

ライブのエンジェリンもこれまた感激。VO & BaのMINEKOさんの存在感には圧倒されます。リアルタイムで見れるというこの喜び。30年前に生まれ、ベルベットアンダーグラウンドを見てのと同じ感情なのでしょう。生きてて良かったと思える至福の瞬間でありました。幻想的。脳内モルヒネで向こうの世界にいました。漠然としか説明できないのが残念ですが、読者の皆様も、一度「エンジェリン」をお試し下さい。必ず効きます。

### 【ディスコグラフィー】



ANGEL' IN HEAVY SYRUP  
(Alchemy Records ARCD - 034)  
1st 1991か1992に発売?



ANGEL' IN HEAVY SYRUP  
(Subterranean Records SUB 74 - 2)  
1stのカナダ盤



ANGEL' IN HEAVY SYRUP  
(Alchemy Records ARCD - 055)  
2nd 1993発売



ANGEL' IN HEAVY SYRUP  
(Alchemy Records ARCD - 072)  
3rd 1995発売

### 【その他関連音源】



・SLAP HAPPY HUMPHREY  
(Alchemy Records ARCD - 071)  
VO & Ba MINEKOさんと非常階段J O J O広重氏のユニット

- ・シュガーカイトのグーンカセットからのアルバムに、G & 鉄琴のナカオさん参加。
- ・CHRISTINE 23 ONNA (INSIGNIFICANT RECORDS INS - 017)「Space Age Batchelor Pad Psychedelic Music」  
Gフサオさんと、マゾンナ、マゾ山崎さんのユニット。1996発売
- ・他、アルケミーの女性ギタリストのセッション? CDに、Gナカオさんが参加しておられます。

現在判明分は以上。(すべて廃盤かどうかは不明)  
(98.7.16.)

### 第4回/HARUMIさん

VERVE FORECASTからリリースされた、「HARUMI」という、謎めいたアーティストの二枚組アルバムがあります。初見は約2年前、大阪梅田の某中古レコード屋のサイケコーナーにて。そのジャケットには不気味な東洋人系の人物が描かれており、異様な雰囲気も充滿。年に数回ある、サイケファンのツボを激しく突く、至福の瞬間でした。しかし、残念なことにこの某店の値段は僕自身の基準中古プライスの4倍。オーラのみを吸収してこの時は退散しました。しかし、忘れる事の出来ない「HARUMI」。帰宅間もなく、サイケのタネ本「THE FLASHBACK」にてチェック。

[An oriental gentleman whose totally weird and freaky double LP, Harumi (Verve Forecast FTS 3030-2)1967 R1, was produced by Tom Wilson. As one would expect, it's full of eastern influence and interesting in place but something of an acquired tast.]



このような解説なのですが、いまいち説明不足で、実体がつかみきれません。しかし、VERVEで1967年ということは、ヴェルヴェットアンダーグラウンド!!! ということで、気になって仕方ないレコードだったので。

その後、再び、なんば某レコード店で「HARUMI」を発見。梅田よりは安いはまだ高い。しかし、決死の覚悟で購入。(後にアメ村某レコード店で再々発見。さらに安かったのでショック)この店では確か「DISK 1はポップだが、2はヘビーな内容」というコメントがつけられており、さらに期待は膨らむばかりでした。



帰宅し、レコードジャケットを広げると、なんと内ジャケットには、謎の日本語が記載してあるのです。

故郷の島に春が来る  
町の娘は仕事を休み  
8日間ザクロの森に  
集まり遊ぶ  
おい春よ はすの花はつゆにぬれ  
美しく光り輝く  
水は谷間をかけめぐり  
霧は山を包む  
カクコウ鳥が鳴いている

あゝ霧が晴れて来た  
高い山がそびえ立つ  
きのう僕が登ったのはあの山だ  
あの頂で帽子を振つたのだ  
山から降りて来た  
僕は春海だ

世の人々に僕は今  
言葉の代りに歌をおくろう  
ザクロの森の娘達にも  
地震や雷、火事や親父にも  
僕は歌をおくろう

かなりきていることは間違いありません。一層不気味さが増してまいりました。

やっぱり日本人がかなり濃厚に絡んでいる事が判明致しました。古い海外日本人ミュージシャンでは、ダモ鈴木や山内テツが思い浮かびますが、それよりも「HARUMI」は古い事になるのでは。と思うと胸がときめくばかりです。

そして、DISK 1を聞いてみると、これが、なかなかの佳曲揃いなのです。本当にいい楽曲ばかりなのです。メロディーも下手にキャッチーになりす

ぎず、適度なポップ感があって心地良いのです。「HARUMI」はどうか、ポップなR&Bが好きな人のようで、ベン・E・キングや、STAXのポップな曲的なものが元ネタになっているようです。しかし、声質はもろに日本人。ソウルフルさは微塵もなく、これがよい味を出しています。

そして、演奏はかなり荒々しく、タイトさに欠けているため、B級さが倍増しています。バックはクレジットの限りでは、アメリカ人のようです。さらに、同時期の日本のGSがよく使っている、チープなオルガンがやけに目立ちます。アルバムの路線としてはゴージャスにもっていかうとしているはずなのに、かなりのミスマッチをかもし出しております。そして、エフェクトのかけ方が派手で、Voのエフェクトなど、はっきりいって耳障りな部分があります。ホーンのMIXのバランスも明らかに最悪です。もっとすっきりしたアレンジをしてたら、広く知られたアルバムになったでしょう。でも結局はこのままでも素晴らしいアルバムなのです。

なんてことを思いつつ、DISK 2に移ると、そこには大きな衝撃が待っていたのです。DISK 2は、オモテ、ウラ一曲づつの構成となっているのですが、オモテ面は、これはよくある、長編つづやき系の曲。静けさのもと、つづやきが続きますが、突然、三味線が登場。24分の曲ですが、三味線がフューチャーされていきます。この三味線の響き、リアルタイムの西洋人にはどのように聴こえたのでしょうか。



そして、ウラ面は「SAMURAI MEMORIES」。曲名からして期待させる曲ですが、予想以上の衝撃が。皆様は、ヴェルヴェットアンダーグラウンド三枚目の「MURDER MYSTERY」

の歌詞を直で理解しつつ聴いてみたいと思った事がお有りだと思いますが、この夢をかなえてくれるのがこの曲です。なんと、「SAMURAI MEMORIES」は日本語曲だったので。

19分に及ぶ曲なのですが、サイケR&Bなサウンドをバックに(これが実かっ 可愛い)淡々と、かたことこの日本語でHARUMIが語って行きます。「ああ、はる みが、あの、このたび、ええ、れこーどに、にほんむけに、ええ、のせることになりまして、あの、ほんとうに、あの、にほんのかたがたに、はじめてきていただけられるようになりますとおもいますけども」と始まり、自分の音楽歴を語ります(三オの時にハーモニカを始めたそう)。そして突然、HARUMIの父親が登場(父親の声は鈴木茂の声に似ている)、10年前にここに来たとの事。5,6年前にHARUMIにギターをかってやっつらしい。ということ、HARUMIは在米日本人ということになります。途中から母親も登場。話題はヘアースタイル、

ヒッピー論などに展開。HARUMI は侍のちょんまげを引き合いに弁明。ロックンロール論にも展開。大人、両親はロックンロールを理解していないとのこと。ロックンロールは発散だという。父は、ロックンロールは初めはうるさい音楽だと思ひ、嫌いだであったが「いいのもあるな」と回心したとのこと。とにかく、HARUMI はスタイルで人間を判断されるのが気に食わないようで、大人対子供という図式がこの曲のテーマとなっているようです。HARUMI は十年前に来たので、「日本語がおかしくなってる」とのことです。

残念ながら、HARUMI さんの冒頭の思ひはかなわず、日本盤化は昔も今もなされてないようです。

リアルタイムの西洋人にこの曲の感想を聞いてみたいものです。さぞサイケだった事でしょう。海外つづやき系サイケ曲に無念の思ひを抱いていた我々日本人には嬉しい限りです。同時に、「日本語のわからない西洋人、この苦しみを味わえ」という思ひも抱きます。

あたりまえの事ではありますが、歌詞が理解できること、曲と一体化して味わえる事はいいものですね。これって、洋楽リスナーの究極の矛盾ですね。

このレコードを聴かない訳にはいかないでしょう。早速レコード屋に走り「HARUMI」を見つけて下さい。

HARUMI さんは、DISK 1 で本当に良い曲を書いているらしいです。しかしながら、1967年という時代によって上記のようなアレンジ、そしてアルバムに仕上げられてしまったのでしょうか。結局パツとせず消えてしまったようです。もしHARUMI さんがあと5年遅くデビューしていたらロック史に大きく名前が残っていたかもしれません。偉大な才能が時代によって埋もれてしまった一例でしょうか。サイケカルチャーの弊害ですね。でも、これはあくまでもメインストリームとしてのロックとして考えることであって、このアルバムは、サイケのカテゴリーとしては絶品です。この埋もれた大名盤を世に広めて行きましょう。これが我々の使命です。おそらく、どの本にも紹介されてませんので。

しかし、HARUMI さん、いいものを残してくれました。ぜひお会いしたいです。(98.8.30.)

## 【栗原徹二の「結局 80's」】

栗原徹二(80年代評論家)

### 第3回 / 再結成ブーム(1)

カルチャークラブが新しいアルバムを出すそう。ライブとかも入って純然たるニューアルバムというわけではない様であるが、今やトップクラスのハウスDJになっているボーイジョージの心境はいかに。多分洋楽雑誌などでインタビューが載ると思うので、それを立ち読みする事にしよう。再結成のアーティスト写真を見る限りでは、額が後退していたボーイジョージは被り物をしていた。

先日英国に出向いた際に現地のコンサート情報を見ていたら、暮れに「カルチャークラブ+ヒューマンリーグ+A B C」という布陣のジョイントコンサートがあるらしい。このメンツで来日しないだろうか。

どのグループも80年代中盤に全盛期を送っており、カルチャークラブはいわゆる「元祖ビジュアル系」とメディアには称されている。しかし、ソウルやR & Bをやったビジュアル系は後にも先にもボーイジョージくらいではなからうか。

(98.10.1.)

### 第4回 / 再結成ブーム(2)

表題にはブームと書いたが、世間的にそういう事になっている訳ではなく、マイブームのブームに近いのである。

解散していたわけではないが、ヒューイ・ルイス & ザ・ニュースも来日するそうだ。彼らもその全盛期を80年代に極めた人々であった。

ただのロックンロールバンドだった割には、ドラムマシンをさりげなく使っていたり、当時のMTVブームに乗って面白ビデオクリップを作っていたり、バックトゥーザフューチャー作目の主題歌を唄ったりと80'sっぽい活動をしていた。

最近の彼らのアーティスト写真を見ていないので断定は出来ないが、多分結構じじいになっちゃっているのだろう。

そういえば再結成と言えば、こないだはジャーニーが来日していた。でもボーカルは違う人だったそうなので、コンサートに行った人は、事前に告知はされていても何となくだまされた感が強かったのではなからうか。

(98.10.3.)

## 第5回 / ホンダZのCM

つれづれなるままにTVを見ていたら、いきなりZZ TOPの3人がCMに登場し、サバクで昔ながらにギターをグルリと回転させていた。

CMに登場したというのは、恐らく制作スタッフの誰かが彼らの強烈なキャラクターを覚えていて起用したのだろう。

ここで補足説明に入らせて頂くが、ZZ TOPというのは、ブギーやブルースなどの土臭い音楽をやるトリオで、キャリアは多分もう20年以上だと思う。80's中期から後期にかけては、ブロード美女とピンクの車が出てくるドラマ仕立てのプロモビデオをバンバン作り、MTV黎明期には常連バンドの一つだったのだ。

冒頭に述べた「ギターを回転させる」というのは、ストラップをぐるんとやるあれではなく、ギターの背中に何か仕掛けがあって、ギターが風車のように本当に「回る」のだ。御興味がおりの方は、グレイテストヒットビデオがあるのでそちらを参照されたい。エルビスのViva Las Vegasのカバーもやっている。

その頃の音は、今風に言うところとちょっと打ち込みっぽいビートのロックンロールだった。けっこうデジタルな感じの音なのだが、ギターソロにあると、急にスワンプビーになって面白かった。

身近なところでは、バックトゥーザフューチャーのパート3にもこの人達は出ていた。確かマーティとドクが町のお祭りに行って、ピフの先祖に決闘を申し込まれるところで、ダンパバンドをやっていたのだった。こちらも興味のある方はレンタルして頂きたい

(98.10.13.)

## 第6回 / プリンス

元プリンスが昔のバックバンドであるRevolutionとまたアルバムをつくらしいというニュースを発見した。(http://www.cmjmusic.com/News/cmj.html#storyc)

音録ったトラックにウエンディー&リサと元プリで新たに何か加えて作るとの事。

このニュース記事に載っていたオフィシャルWeb Siteというのにアクセスしてみたが、実に妖しい感じで本当にオフィシャルなのかどうかという感じであるが、お暇な方はご覧あれ。

(http://www.love4oneanother.com/home.htm)

デビューが確か80'sの始めて、パープルレインで売れたのが82か83年くらいだと思う。ブレイク

する前は当時のローリングストーンズのStill Lifeツアーで前座をやったブーイングの嵐だったという話を以前聞いた事がある。

プリンスというのは昔も今も本当にジャンル分け不可という感じがあって、冷静に考えると、「何であんなにキモチ悪い小柄な男の裏声の唄を聴かねばならぬのだ」と思って然るべきなのだが、やはりあの何とも言えぬ毒気に当てられた方は多いだろう。

先日訪れたカラオケで、彼の80年代後期のヒット曲「KISS」があったので挑戦してみたが、とても唄えるシロモノではなかった。準備中のアルバムも、最近のファンク調ではなく、またわけの分からない怪しい80'sフィーリング溢れるものになる事を期待しよう。

(98.10.15.)

### <ご案内>

「通生レコード通信」に掲載されたコンテンツは通レコの擁するもののほんの一部です。是非通生レコード公式サイト「通生レコードの世界」(http://www.t3.rim.or.jp/~kakou/index.htm)をご覧ください。所属アーティストの最新情報はもちろん、音楽評、その他膨大な文章量であなたに迫ります。また週に一度E-Mailでお届けするメールマガジン「通レコ通信」も開始いたしました。通レコサイトの最新情報はもちろんウェブでは扱いきれなかったテーマを取り上げます。詳細は通レコサイトをご覧ください。



## 【俺雑記】

### 第1回 / 珍説万歳

雑誌「ユリイカ」(青土社) '87年5月号「特集・江戸川乱歩」に全集未収録作品として「ホームズの情人」というどこぞの雑誌(多分「宝石」あたりだと思っただけれど)に書かれた短いエッセイが掲載されている。

内容は要するに生涯独身を通し女性には何も関心を持たなかったとされるシャーロック・ホームズには実は情婦がいたというホームズマニア、いわゆるシャーロキアンのある学説(?)の紹介である。これを唱えたのは戦前に登場した米国の探偵作家レックス・スタウトで、その情婦というのが、他にもないホームズが長年共同生活を続けた友人、ワトソン医師だというのだ。

スタウトはホームズ全集の何千頁のあらゆる箇所から引用し、ワトソンが実は女性であり、ホームズの愛人であったことを証明する。ちょっと挙げてみれば「ホームズ物語の語り部であるワトソンが60篇の伝記の中で、ホームズの私生活に関して詳細に語っているに関わらず、寝室の生活について一言も触れていないのはおかしい、ワトソンが男ならそんなことを隠す必要はないはず、だとか、ある短編の中で、殺されたと思っていたホームズが不意にその姿を現した時、ワトソンが驚きと喜びで気を失いそうになる箇所を差して「いくら何でも大の男がそんなことで気を失うはずがない」と正直たわいもない論拠を羅列し「ワトソン愛人説」を主張している。

特に痛快なのがスタウトがある暗号解読の手法によって導き出したワトソンの女名前。乱歩の伝によると「ホームズの60篇の物語の題名を年代順に並べて、この中から神秘の数7と11だとか彼等がベーカー街に同棲した時のホームズの年齢27歳、ワトソン(遁注・原文ママ)の年齢26歳などの数によって題名を算えその順位に当るものを抜粋し」た11篇のタイトルを並べると

Illustrious C ienet  
Red-headed League  
Engineers Thumb  
Norwood Builder  
Empty Huose  
Wisteria Lodge  
Abbey Grange  
Twisted Lip  
Study in Scarlet  
Orange Pips  
Noble Bachelor

となり、この題名の頭1字を拾っていくと

IRENE WATSON

となり、つまりワトソンの女名前はアイリーンである、というもの。単なるオカルトですなこれは。

しかしこの説は1940年代当時かなりの反響を呼んだらしく、「なるほど」と同意する者、「神聖なるホームズを汚辱している」と異を唱える者と喧々諤々の議論が繰り広げられたようだ。最後には最初女性として登場したワトソンは途中で兄のワトソンと入れ替わったなどという「ワトソン2人説」まで飛び出したというから大笑いである。

何だかんだ云っても所詮は小説の中のお話、数々の説を唱えた人々が皆本気でそのことを信じていたとはとても思えないし、事実乱歩もこのエッセイの最後を「さて次にはどのような珍説が飛び出すことであろうか」という文章で締めくくっている。架空の世界を面白がる人々を面白がる、何とも楽しい話ではないか。

これを読んでまず思い出したのが、ビートルズマニアによる「ポール死亡説」。解散も目前の'60年代末、どこぞの学生たちが「現在ビートルズにいるのはポールの偽物であり、本人は既に死亡している」と唱え、あっという間に全世界に広がったこれまた珍説といえば珍説。あまりの大騒ぎに休暇中だったポールが「私は生きている」と声明を出したと云うからその反響の大きさがうかがえる。似たような例として我が国でも「水割りをくださ〜い」の「堀江淳死亡説」ってのがありましたな。これも本人がラジオ出演して生存を主張、だが「いやいや、あれは偽物だった」などとますます死亡説が盛り上がりつつして・・・あ、最近「志村けん死亡説」も・・・いやいや、ま、これは置いといて。「ポール死亡説」これはとにかく有名な話ですな。

で、彼らが論拠としたのが「I Am The Warlus」のエンディングにジョンの「I buried Paul」(私はポールを埋葬した)という声が入っているだとか、「Abbey Road」のジャケ写は葬式の風景の暗示であり、横断歩道を渡るメンバー中、ポールだけが裸足なのは彼が死者であることを表している、なんてな話。同じく「Abbey ~」のジャケ写で左手に写るワゲンのナンバーが「28 1F」なのは「ポールがもし生きていたら28歳だった」という意味だ、なんてのもありましたな。

今でこそ笑って済ませるけれど、この話を本で初めて知った15,6の頃、本当に気持ち悪いモノを感じたりした。

だって「I burried Paul」って確かにそう聴こえるもの。しかもジョンの声が不気味なんだな、これだ。

まあ、皆さんご存じの通り、ジョンは「Cranberry Sauce」って云ったってのが真相らしいけれど、いやあ、今聴いても「I burried Paul」の方が近い気がするのだがどうか。当時バンド内でリーダーヅラしつつあったポールに対するジョンの皮肉だったのはっていうのはちと考え過ぎか。これじゃあ件のシャーロックアンやビートルズマニアの学生たちと変わらんか。

まあ、とにかく。  
お偉い学説ひとつ取ってみたって、まず先に仮説というか自分が導き出したい結論があって、それを証明するために論拠を積み上げていくというのが一般的なわけで、その積み上げ方が上手だった学者さんが偉いってわけですよ。今回のホームズ学者、ビートル学者さんは初めから重なる訳のないポールを無理矢理串刺しにしたり接着剤やらでくっつけたりして仮説に結びつけたって感じですか。もちろん、自分で苦しいこじつけだわかってるのにオカルトを持ち出したりして、その課程を楽しんでいたんだらうし。でもこういうデマだとか珍説ってのは嘘とわかっていても他人に広めたくなる面白いストーリーが無ければ影響なんて及ばないわけで、片や欧米のホームズマニア、片や世界のビートルマニアに論を知らしめることが出来たってことは、これはこれで優れた学説(?)って云えるのかもしれないな。

でもホントに怖がってしまった若かりし私みたいな人もいたわけだし、小説中の人物ホームズの場合は良しとしても、勝手に死んだものとされてしまったポールや堀江淳、志村けんにとってはとんでもなく迷惑な話である。

・・・何とかもってもらいたい結論をと考えていたらこんなつまらん正論を吐いてしまった。

(98.9.3.)

## 第2回 自分コレクター

乱歩ネタが続いて恐縮ではあるが、先日、何気なく入った何て事はない古書店にて5,6年前に沖積舎から出た「探偵小説四十年」の復刻版の超美品を発見。

価格5,000円・・・買うしかない。

「持っておくべき本は若い内に借金してでも買え」と誰かが云っておったが、現在私が若者かどうかは別として、確かにそう思う。

でも最近では古書店でお気に入りの作家の初版本

を見掛けても見て見ぬ振りを出来る冷静さを持つようになった。同じ内容なら文庫で結構ってことなんだろうが、大人になったんだか、つまらん人間になってしまったんだか、まあとにかく。このいても立っても居られない気分は実に久しぶりであった。

オーソドックスな洋装丁、表紙は黒地の布に銀色でタイトルが記されている。収める箱は初版時の黒地に乱歩の著作の書影をあしらったものと復刻の際に付けられた、段ボール製の書棚前の乱歩の3枚の写真を載せたカバーがかぶせられたものの2重の作りとなっている。

飽きずに何度も何度も眺めてはペラペラと頁をめぐり拾い読みをする。何だか始めから最後まで読み切るのがもったいない。しばらく遊んでからゆっくりと楽しむことにする。

ちょうどその時期読んでいたのが本橋信宏「裏本時代」(飛鳥新社)。売れないライターであった彼が、裏本の製作・流通の世界を取材していく中で現在はAV監督として有名な村西とおると出会う。村西はこの本の中では「会長」という名で登場するのだが、会長は当時裏出版の世界を牛耳り、そのままで飽きたらまず一般市場で「スクランブル」というスクランダル写真雑誌を創刊、若い本橋を編集長に任命する。「スクランブル」は独自の路線でそこそこの成功をおさめるものの裏本界の一斉摘発のおおりで資金難となり廃刊。そんなたった数年間のあまりに濃密な時間を描いたノンフィクション作である。

この本の中で著者は敬愛する作家として乱歩を挙げ、「探偵小説四十年」から何度か引用を試みている。実に面白い本であっただけに今回の出会いが単なる偶然とは思えない気がするが、まあ偶然か。

「探偵小説四十年」の内容に触れていなかった。これは乱歩がデビュー時からメインに執筆していた雑誌「新青年」に連載された「探偵小説三十年」、同誌の廃刊と共に雑誌「宝石」移って続けられた「探偵小説三十五年」に補足をした記録体自伝である。

乱歩の自分コレクターぶりは有名な話で、自分の生い立ちから自分に関する新聞記事などの資料をスクラップし「貼雑年譜」と題した冊子にまとめていた。確か3冊目までは記事ひとつひとつに詳細なコメントが加えられており、以降資料の山は9冊まで続いた。この3冊目までは乱歩の死後、一級の資料として確か出版されたはずである。その本のことなのかどうかは確かではないが、かつて「貼雑年譜」のダイジェスト版のような豪華な製本の書物を見たことがある。新聞・雑誌に掲載された自分に関する記事はもちろんとして著書の広告、「屋根裏の散歩を地で行く怪盗」などといっ

た乱歩の小説をもとにしたとする犯罪の記事等々事細かに年代順に整理されている。なんと自分が出した手紙までカーボン紙で複写し、その返事とともに保存、更に驚くのは乱歩の出生時から移り住んだ住まいのほとんどの間取り図が手書きによって掲載されている点。乱歩も頻りに住まいを変える人だったが父繁雄も転居を繰り返したそうで、名古屋市内で5回、中には3ヶ月しか居なかったところもあったそうだ。そんなものよく憶えていたものである。もちろん乱歩自身の記憶だけでは無理な話だろうが。気持ちはわからなくてもないがなかなか出来まい。正直異常ですらある。その辺りに我々が乱歩に惹かれる所以があるのかもかもしれないが。

そんな「貼雑年譜」、そんな資料があればこそ、これだけ詳細な自分史が書けるわけで「探偵小説四十年」は読む「貼雑年譜」と云ってよいだろう。それでも170点を超える写真が掲載されているし、巻末には細かい索引、写真だけの索引まで付けられている。もともと内外の探偵小説マニアであり、筆が鈍ってからは探偵小説界の発展に寄与した人物であるので、その知識、幅広い交流から、ただの乱歩史にはとどまらず、大正末から昭和30年代までの探偵小説史という読み方もできる。自分に関するスクラップ帳から時代が見えてくるってのも何ともすごい話である。

乱歩は「貼雑年譜」のことを引き合いに、著書の中で何度か自分コレクターぶりを披露しているが、その中で私が最も好きなのが「わが夢と真実」(春陽堂「江戸川乱歩全集」付録冊子 所収)の「蒐集癖」(現在は河出文庫「群集の中のロビンソン」で読める)にある一節

歴史家や好事家は過去の他人に関する資料を血眼になって蒐集するが、自分に関するものは蒐集しない。これは主客転倒ではないか。史上の人物の方が自分より偉いから蒐集の価値があると考えられるのかもかもしれないが、そんな他人よりも自分自身への執着なり興味なりの方が強いはずではなからうか。人々はなぜ他人のものばかり集めて自分のものは顧みないのであろう。自分が一番可愛いいだから、自分蒐集こそ最も意味があるのではないか。自分のものを集めるには自分こそが最適の立場にあり、最も正確を期することもできるわけである。自分自身のものはほうっておいて、他人の作った、学問的にも対した意味のないマッチのペーパーや料理屋の引札なんか集めている人の気がしれない。

おいおい自分だって探偵小説や同性愛文庫、浮世草子のコレクターじゃねえかと突っ込みたくもな

るが、これらを集めるのは学問的に意味があるってことなんすかね。乱歩のエッセイ数あれど(多分小説よりも紙数は多いだろうな)、「マッチのペーパーや料理屋の引札なんか集めている人の気がしれない」などと子供みたくにムキになった攻撃的な文章は珍しく、印象に残っている。

この奇異な印象を持ったのは私だけではなくたようで、今回乱歩関連の資料を改めてひっくり返してみたら、澁澤龍彦が全く同じ箇所を引用して乱歩論を展開しているのが可笑しかった。1969年に講談社から出た「江戸川乱歩全集第2巻」に寄せられた「玩具愛好とコートピア/乱歩文学の本質」(現在は福竹文庫「偏愛的作家論」で読める)という一文で「乱歩文学の精髓は短編にある」という主旨の論を進め、最後に上記の箇所を引用し

これは一種のナルシズムにはちがいないだろうが、何だかひどく散文的なナルシズムのような気がする。いかにも乱歩らしい論理で、「自己収集」(原文ママ)とは傑作だ。しかし、よほど几帳面な人でもなければ、こんな丹念な収集の仕事はつづけられない。

(中略)

そんな乱歩の人間としての一面にも、私は大いに興味をそそられるのである。

と締めている。それまでカフカや稲垣足穂らを引き合いに冷静な分析を述べてきた澁澤が、最後にニヤッと微笑んだような何とも楽しい気分にさせられる。思えば対照的な2人である。澁澤に自己蒐集という性質はなかったし、晩年まで自分自身を語ると云うことをしなかった人物である。貝殻から螺旋の魅力を語ったりと乱歩に云わせれば「学問的に意味のないもの」から学問、文学の意味を引き出したと云って良いだろう。上記の一文は乱歩への反論なのかなんなのか。乱歩は澁澤をどう読んだらうか。

そんなわけで読んでもない本からガラガラと大した結論もなくここまで来た。そろそろ読んでみましょうか。

(98.9.15.)



## 【The Beach Boysを大いに語る】

浜尾 六郎

単なるファンでは飽きたらず  
マニアと呼ぶには幼すぎ



Beach Boysは夏の消費音楽  
(レコ評「Best Of The Beach Boys」  
(capitol DT2545))

初めてブライアンの声に触れたのは  
確か今から12,3年前になる。

当時のFMラジオは今のようDJがしゃべりまくるようなモノではなく、しゃべりは極力少なく、で、曲を始めから最後まで掛けるという番組が主流だった。レコードを買うお金もなく、貸レコード店を利用するにも何を借りるべきか慎重に選ぶ、そんな感じだったからFMというものはとても重要な情報源であった。今もあるのかもしれないが、オンエアされる曲目が掲載された番組表の載った雑誌を買い、聴きたい曲にマークを付け、カセットテープに録音したもの。エアチェック・・・そんな言葉もあった。最新のヒットチャートの楽曲や60～70年代の大作についてはFMから学んだところが大きい。

かつてNHK-FMで夕方4時から2時間、毎日特定のアーティストの特集組み、2～30曲近く流す番組があった(今もあるかもしれないが)。当時私は中学1年生、夏休みの退屈で穏やかな日々を今にして思えば無駄に過ごしていた。

その日の特集はビーチボーイズ。安易と言えば本当に安易、だがその日は初期のナンバーから30曲近くもオンエアされる。雑誌で何でも目にするバンドをまとめて聴くことが出来るもってこいの番組だ。私は120分テープで番組を全て録音し、DJの曲紹介部分をカットし、2本の60分テープに編集した。そして私は夏休みの間、何度も何度もそのカセットを聴いた。

そうである。当時は何ヶ月かに一遍レコードが買えればいい方で、貸レコードにしてもレンタル料は結構高かった。一度入手した音源は多少気に入らなくても何度も聴いたものである。そして次第に好きになっていった。

現在も当時ダビングしたカセットや購入したレコードが残っているが、歌詞から曲順から隔々まで今だに憶えているものである。

そんな風にして私は初期ビーチボーイズに夢中になっていった。

ちょうどその時、音楽の授業の宿題で「夏休みに聴いた音楽」という題で作文を書けというものがあり、他の者がクラシックの名曲でもっともらし

いことを書いているのに、私は3rd「Surfer Girl」収録の「Hawaii」(邦題「夢のハワイ」)を取り上げ、「ビーチボーイズねえ・・・」と教師に苦笑いされたものであった。

それにしても何でこの曲だったのか不思議であるが、「ハワイへの憧れが伝わってくる」とか何か書いた記憶がある。「あこがれのハワイ航路」がかったの。  
今となっては自分で自分に苦笑いである。

そんなわけで「ビーチボーイズのレコードが欲しい」その思いは次第に強くなっていった。当時レコードは2,800円もした。小遣いが3,000円だった私には大きな出費である。それを少しでも安く抑えるには輸入レコードで購入するのが良い、歌詞カードは付いていないが、それなら2,000円ほどで買えるはずだ・・・当時父親の仕事の都合で埼玉県春日部市近くに住んでいた私は、東武野田線に乗り千葉県柏市にある輸入レコード店へと出掛けた。

そうだったよなあ。当時って輸入レコード店って少なかったよなあ。今みたいに雑誌感覚でCDが買えるようになるとは夢にも思わなかった。

そんなわけで30分かけて電車に乗り、目的の店に入ると真っ先に「B」のコーナーへ。大好きなBeatlesは今回は見ないようにして隣のBeachBoysに集中・・・色々あるんだなあ。「Pet Sounds」・・・これって名盤らしいけど発売当時は売れなかつたらしいし、多分マニア向けのアルバムなんだろうなあ。知ってる曲も全然無し・・・おっベスト盤だ。この曲知ってる、あ、これもこれも。うんうん、コレにしよう。

そうして購入したのが最初から「Today」(65年)までのベスト「Best Of The Beach Boys」であった。そう、「Pet Sounds」は駄作だと判断したキャピトルが急遽発売した因縁のアルバムである。当時、レコード会社にとってもファンにとってもBB5は単なるサーフィンバンドに過ぎなかったわけで、そのイメージとあまりにもかけ離れた「Pet Sounds」に欲求不満だった大衆は案の定、このベスト盤に飛びついた(でも遠く離れた英国では高く評価され、ポール・マッカートニーに「今まで聴いた中で最高の作品」とまで云わしめたという事実も忘れてはいけません)。そうしてブライアンは失意のどん底へ、メンバーからも総スカン、そして「Smile」へ・・・

事実、当時私にとってもBB5は夏休みの楽しいBGMぐらいのモノでしかなかったわけで、あれだけ夢

中になったというのに夏の終わりとともにそんな熱も次第に冷めていった。時々雑誌等で「英国のビートルズ、米国のビーチボーイズ」などという論調の記事を見かけても「何云ってんだ。ビーチボーイズなんて所詮、夏の消費音楽じゃねえか。比べるんじゃないか」と思っていた。「軽かじった程度で何云ってんだ」と今では自分で自分に苦笑いである。

でもねえ、何だか健全な音楽ファンだったんだなぁと遠くを見てみたりもする。そんなわけで思い出のアルバム。輸入盤のレコードって独特の匂いがして、それがまた好きだった。改めて引っぱり出して嗅いでみたりする。(98.7.8.)



レコ評 Brian Wilson/  
I Just Wasn't Made For These Time」  
(MCAD-11270)

この邦題「駄目な僕」ってなんかならんのかい。

ドン・ウォズが作ったブライアン・ドキュメンタリー映画のサントラ。

全曲 BB5 やソロアルバムの楽曲のセルフカバーで新曲は全くなし。

娘達がコーラスに参加したりとかつて精神に障害を来すほど執拗に音にこだわり作り上げた楽曲群を肩の力を抜いてサラッと唄ってみたという趣。

これを素晴らしいと繰り返し繰り返し聴きうったりしている自分、「ブライアンは優れたサウンドクリエイターである以前に最高のソングライターであるということに再認識」と結論づけることは簡単。うん、とてもきれいに文章がまとまる、……いや、ちと待てよ。

これってとっくに全盛期を過ぎて舌が回らなくなった落語家に「あのろれつ感じが味なんだよ」って云ってるバカオヤジと一緒にじゃねえか。……確かに初めてこのアルバムを聴いた時、「何か声がREMのマイケルなんかかみてえだな」と笑った自分が居たな。

いやいや一度で「素晴らしい」と思えるアルバムほど飽きは早いわけで、こうして繰り返し繰り返し聴いている自分にウソはないはず。

そう、良いアルバム。間違いない。

あああああああ、いいいいいい。落語オヤジで結構結構。

現在連載中 / 発売記念集中企画



「Endless Harmony Soundtrack」  
(TOCP-50720)

～ 途中挫折必至の全曲解説 ～

あちこちでアナウンスを見かけ、輸入盤を店頭で見掛けでもぐっとこらえ、ついに日本盤発表となり、満を持しての入手の BB5 版アンソロジー「Endless Harmony」。正確には結成 35 周年記念番組(米国 VHI)のサントラという位置づけなのだけれど収録曲は未発表曲、別バージョン、ライブのみ(正確には 2 曲は市場に出たことがあるが現在は廃盤)、全 25 曲 CD、収録時間ギリギリのボリュームである。

「Pet Sounds Box」の件もあったし、とにかく無事発売にこぎつけたことを大いに喜ぼうではありませんか。それにも発売が決定している映像バージョンは一体どんな内容になっているのだ。人間の欲にきりはなし。

遁レコサイトに地味ながら原稿を書かせていただいていた私が、晴れて単独コーナーを得ることができたのも全てこの企画のため。単なるファンでは飽きたらず、マニアと呼ぶには幼すぎ。無謀との声も聞こえる中、途中挫折必至の「Endless Harmony」全曲解説。こまめにアップして参ります(10/21 現在 4 曲分・残 24 曲)。

14. Darlin' (Live-1980)

'67年「Wild Honey」収録。この時期以降のカールの台頭ってのは、最近ではよく語られるテーマではあるけれど、結構ブライアンの才能の影で気付きがたいものがあった。「Smile」の残骸を世に出してしまった「Smiley Smile」の後、ブライアンはご存じの通りで、デニスはお姉ちゃんとお薬で遊びほうけ、従兄弟のお兄ちゃんは偉そうなことばかり云って才能もない。そんな身がどうしようもない中、実質カールがバンドを建て直し、引っ張っていたわけで、そんな姿を思うと何とものけなげで涙ぐましくもある。大袈裟かな。まあ単に伸びゆく自分の才能が面白くてたまらなかつただけかもしれない。

これはブライアン作の楽曲であるけれど、この青さも残しつつの力強い声が実に気持ちよい。「Wild Honey」ではスティービー・ワンダーのカバー「I Was Made To Love Her」の唄声も要チェック。原曲よりかっこいいっす。

今回収録は'80年のネブワースライブから。この時のネブワースってZEPも出たよな……いやいや失礼。

いやあ、かっこいいわ。カールは実にソウルフ

ル。しかし'80年だろ。バンドもバリバリ現役。すごい迫力っす。私自身、正直まだBB5のライブバンドとしての魅力に気付いてなかったところがあったのだけれど、まさに猛反省。精進足らず。

(98.10.12)

#### 21. 'Tili I Die(Alternate Mix)

このアルバムが発表となることを知り、最も楽しみにしていた曲。もともと2分半の楽曲の別バージョン、それが5分。一体どんなバージョンに仕上がっているのか。どうやらブートでは有名なものらしいが、私自身今回が初めて出会うことになった。

#### '71年「Surf's Up」収録曲。

ブライアンにとってドラッグ漬けと精神状態どん底の時期で寝室にこもりっきりでスタジオに顔を出すことも少なくなっていた。

タイトル通りブライアンの当時の厭世的な思いを唄った曲である。自分自身を「荒波に浮かぶコルク」「土砂崩れの中の岩」「風の中の木の葉」に例え、道に迷い、深く深く転がり落ち、吹き飛ばされてしまう姿を描く。そして「そんな調子さ 僕が死ぬまで」のリフレイン・・・あまりに悲痛な心情吐露であるのにこの心地よさは一体何なのだ。

こんな精神状態に置かれながら何故濁った心情が楽曲に表れないのかが不思議でならない。悲しくも純粹であまりに美しい楽曲である。ブライアンの'70年代のベストトラックと評する向きもうなずける。

解説によるとこのロングバージョンはエンジニアのステューヴン・デスパーが「自分のために作った」というもの。一応メンバーに披露はしたが、案の定というか結局ボツとなったそうだ。

この曲は確かに2分半でまとめ上げられるべきものであろう。だがしかし、個人的な目的のために作られたものとしては聴くべきところが多いというのも間違いはない。

冒頭2分のインストはベースのみから徐々に楽器が重なってくる構成で、突然バックの演奏は極力抑えられ、ボーカルと「Surf's Up」バージョンでは微かにしか聞こえなかったヴィブラホンがフューチャーされたミックส์となっている。このヴィブラホン、とにかく絶妙である。

またブライアンの声がリードボーカルとして処理されており、コーラスもひとつひとつははっきりと聞き取ることが出来、「Surf's Up」バージョンに比べ、より楽曲がBB5からブライアン個人寄りのものと感じられる。

このミックส์で2分半にまとめるべきだったのか、「Surf's Up」バージョンが正しかったのかは聴き手の判断に任せよう。

(98.10.11)

#### 22. Long Promised Road (live 1972)

こちらも「Surf's Up」収録曲。美しさと力強さが交差するカールの傑作である。どうやら本人もお気に入りのナンバーらしく、ソロライブでも取り上げられることもしばしば。

紳士的で優しい唄声とソウルフルな唄声、対照的な2つの自分の声の魅力を見事にひとつの楽曲に盛り込んでいる。「Darlin'」同様、バックのブラスアレンジも実によい。

今回は'72年カーネギーホールでのライブ音源からの収録。実にライブ映える曲なんだな、これが。スタジオバージョンに引けを取らない「ロック」な演奏。名演なり。

(98.10.13)

#### 25. Endless Harmony

唯一オフィシャルアルバムからの音源。'80年「Keepin' The Summer Alive」より。

当時のマネージャーだったジャック・ライリーとの確執から一時脱退していたブルース・ジョンストンの復帰作で、脱退時期に作った「Ten Years Harmony」をBB5用に書き直したもの。

「Surf's Up」収録の「Disney Girl」に代表されるように、ブルースの作るバラードには定評があるが、どうもこれは個人的に苦手。「Disney Girl」がカールの楽曲と共に「Surf's Up」という一歩間違えば陰鬱になってしまうアルバムに華を持たせることに成功しているのに対して、この曲には軽さが無いとでも云おうか、甘さに湿度が多すぎるような気がするのだ。

「Keepin' The Summer Alive」に於いても、他の収録曲が「夏と海と女の子のBB5が帰って来た！」を合い言葉に軽快なナンバーが多い中で明らかに浮いてしまっている気がする。「せっかくブルースが復帰土産で作ったんだし・・・」と入れるところに困ってB面ラストに持ってきたのでは、というのは深読みか。そういえばこのアルバムでも最後に入ってるな。

しかし、今回のアルバムのタイトルにされているわけで、映像版ドキュメンタリーの方ではこの曲に特別な意味が持たされていたりして。そこがちよっと気になる。

(98.10.13)

連載継続中

## 【対談・ロックヨタ話】

ロックを着にあてもなく。気の合う仲間とヨタヨタと。いいじゃないかよ男じゃないか。男だったらドンとやれ。そんなロックなヨタ話。

### 第1回 / サイケ、ペパー起源論

代表 VS 平田徳雨氏

(「トレモロ家族」編者・シノウ)

#### ライトショウ!

代表 / サイケってすごい曖昧な言葉だと思うんだけどその要素って一体何なんでしょうか。

平田氏 / うーん。確かに曖昧ですよ。しかし、ジャンルとして成り立ってるし。

代表 / それらしい言葉を使えば「音による色彩感覚表現」ってのはひとつにあると思うけど。

平田氏 / それは有ると思います。目をつぶると音が見える感じですね。60年代はライトショウと同時だったし。

代表 / ライトショウ!! フロイドですか。とりあえず。

平田氏 / 僕はジェファーソンエアプレインです。ビデオなんかいいですよ。

代表 / ジェファーソンってなかなかちゃんと語られることって少ないと思うんだけど。

平田氏 / あれは、いろんなことやってて収集つかないからでしょうか?

代表 / 名前変えて音楽性変えて長々とやるからねえ。

平田氏 / そうですね。グレースリックなんてのはゴージャス路線になっていくし。

平田氏 / ダイアナロスと変わらなくなってますしね。

代表 / ははは(笑)。

平田氏 / シェールも同じですが(笑)。

代表 / (笑)。でも60年代後半のウェストコーストロックは確かに面白い。

平田氏 / 最近の再発には目を見張るものがありますね。サイケ色の強いものも含んで。

#### ビートルズとブルジョア革命

代表 / 平田さんにとって「サイケ」を代表するアーティスト、アルバムとは??

平田氏 / 究極のサイケソングはビートルズの「リボルバー」の2曲、シーセッドとトゥモローネバーノーズだと思ってます。アーティストなら、The Deepでしょう。

代表 / うん。私もサイケというものを意識して音楽を聴きただききっかけはビートルズが始めです。

平田氏 / そうですよ。

代表 / でも最初は苦手な部類の2曲だった。

平田氏 / あの二曲は好き嫌いがはっきり分かれるようです。

代表 / ある時ぱっと世界が開けたみたいに理解できて・・・なんだっただろうな。あれって。

平田氏 / 僕も、最初はジェファーソンとか、ザッパのフリークアウトとかは良さがわかりませんでした。しかし、突然くるんですよ。

代表 / うん。「リボルバー」「サージェントペパー」のジャケなんていきなり出されてもさっぱりわからんよ。

平田氏 / 僕も、あれには最初理解に苦しみました。曲は好きだったのですが。当時は同時進行で西村知美も聴いていた頃だったし。

代表 / ははは(笑)。でも今は中身と一致したものとして理解できる。

平田氏 / そうですよ。音楽に時代背景があることを知ったのはサイケを通じてでしたし。

代表 / 「リボルバー」の2曲にせよ「サージェントペパー」にせよある時ぱっと時代背景やらなから理解できて、たまたま好きになっていった。

平田氏 / あれは、自分史の中でのブルジョア革命だったのでしょうか。

代表 / (笑)。私の場合はそこから「ペパー」に影響されたアルバムは何なのか、ペパーの感覚を味わえるものは何なのかって聴き漁ったというのがあります。

平田氏 / 僕もそうでした。サイケバンドは典拠やらを知りたくなりやすいですよ。多大なリンク性も孕んでますしね。好きなバンドと似たバンドを追い求める気持ちですね。

代表 / うん。ちょうど雑誌「レコードコレクター」でペパーの特集があって、そこで取り上げられてたものをひたすら聴きまくったって経験があります。私にとって「サイケっ何か」で云われたら多分まずそこからって感じ。

#### ペパーを巡って

平田氏 / ペパーに影響されたアルバムってほんとに多いですよ。60年代のイギリスのバンドは殆ど似たようなアルバム作ってますしね。

平田氏 / でも、ペパーを超えたアルバムってないんですよ。

代表 / 時代の気分にビートルズが最初に気付いて「そう、これだよ」って追随したんでしょうか。でも誰も超えられなかったと。

平田氏 / 我が愛するスモールフェイスズの「オグデンズ」も全くですしね。

代表 / うん。私もこの流れで聴いた。彼らのアルバムではかなり特殊ですよ。

平田氏 / そうです。はっきりいって、僕はトータルで一番聴いていないアルバムです。個々の曲はいいのですが、構成ミスでしょうか?

平田氏 / 無理矢理のコンセプトアルバムって難しかったんだろうなあ。

代表 / 確かにちょっとごちゃごちゃしすぎかな(笑)。

## R&Bとポップ

代表 / 「ペパー」に影響されたものではどんなものが好きですか？

平田氏 / ベタですが「サタニック・マジスティーズ」は酷評されますが、大好きです。ストーンズの中では一番好きです。

代表 / ミックのビートルズコンプレックスにキースとブライアン・ジョーンズが初めてのったアルバムですね。

平田氏 / あれはビル・ワイマン頑張ってますしね。

代表 / 確かに面白い曲は多い「We Love You」はジョンも絡んでいるって噂もある。

平田氏 / そうなんですか？初耳です。ストーンズとビートルズの関係は良好だったと？

代表 / いやいや良好だったらいいですよ。シングルの発売日が重ならないようにジョンとキースが連絡取り合ってたっていうし。

代表 / 「サタニック・マジスティーズ」の魅力とは？

平田氏 / 僕は、コンセプトアルバムとしては考えてません。ストーンズの持つポップさが爆発した「ストーンズポップソング集」だと思ってます。

代表 / これでストーンズがR&Bを基調としたポップバンドから一歩抜け出せたのは間違いない。

平田氏 / そうですよ。例えばプリティ・シングスも良いコンセプトアルバム作りましたが、アルバムのスタイルとしてはサタニックの影響が強いのではないかと考えてます。もしかして、R&Bバンドにとっては、ペパーよりもサタニックの方が影響が強かったのではないかと思うのですが。

代表 / それは面白い。プリティ・シングスは「S.F.Sorrow」ね。

平田氏 / そうです。あれも結構いいですよ。もともと、R&Bバンドには多大なポップセンスがあったということでしょう。

平田氏 / アニマルズも「サンフランシスコの夜」で成功しますし。アニマルズは良いサイケ曲多いです。

代表 / アニマルズってきちんと聴いてないのです。何となく泥臭いイメージがあって(笑)

平田氏 / 朝日のあたる家のイメージと、エリック・バードンのルックスの悪さですか(笑)？

代表 / 多分(笑)

平田氏 / 首が無いですからね。エリック・バードンは(笑)

代表 / ははは(笑)。ともかく「サタニック・マジスティーズ」以降、ブライアンの一件もあって一時ストーンズは道を見失いそうになった。プリティ・シングスも人気は今ひとつに。あの時代の

波に乗ることは果たして正しかったのか・・・。  
平田氏 / 後の、80年代から90年代にかけての音楽のためにはなかったのではないかと思います(笑)

代表 / うん。

平田氏 / バンクを飛び越えて孫弟子あたりが活躍しましたしね。

## ホリーズ「Butterfly」「Evolution」

平田氏 / ところで代表の好きなアルバムは？

代表 / 私がパットと浮かぶのはホリーズの「Butterfly」「Evolution」だったりします。

平田氏 / なるほど。ピーチボーイズフリークならではの回答って感じがしますが。

代表 / そうなんですか？

平田氏 / コーラスワークということで。

平田氏 / 安直ですが。

代表 / そっか。コンセプトアルバムとしては「バタフライ」の方が良くできていると思うのだけど、どちらもポップソングとしての粒は揃ってます。

平田氏 / あれらは割と最近になって再評価されだしましたね。VANDA誌の興隆とともに。

代表 / そうですな。これもまた「バストップ」のイメージがでかすぎたと・・・。

平田氏 / 「バストップ」はカラオケで歌います。  
代表 / ははは(笑)。

## バース初期はベスト盤で

代表 / バースの「名うて」なんかはいかがですか？

平田氏 / 聴いたのはかなり前なんで詳しくは忘れてしまいましたが、代表はバースではこの辺がお好きなのですか？

代表 / 個人的にはバースではこれがフェイバリットですな。

平田氏 / なるほど。確かに渋いですしね。

代表 / バースの「ペパー」はコレだと思います。

平田氏 / エイト・マイルス・ハイあたりは「リボルバー」ですな。

代表 / サイケ度から言えば確かに「5th Dimension」が上かな。

平田氏 / 初期バースのアルバムって、曲の善し悪しが激しいですよ。アルバムで聴けるのは中期以降ですよ。

代表 / 初期はベスト盤でって感じですか。

平田氏 / それで事が済むのではないかと(笑)。初期のやつはベスト盤残して売ってしまいました。

代表 / ははは(笑)。

## ペパー、ザッパバクリ説とトータル性

平田氏 / ところで、気になることが。ペパーはザッパのフリークアウトのバクリだという説があるのですが、如何。この説は地元のレコード屋の

ザッパマニアの一案氏が言ったことなんです。後にザッパは報復にペパーのジャケットのパロディーをしますね。

代表 / 「金のためにやってる」云々ってやつでしたね。これって67年でしょ。

平田氏 / 確かフリークアウトは66年ですよ。

平田氏 / でも、フリークアウトにトータル性はあるのでしょうか？

代表 / ザッパとジョンはかなり親交が深かったみたいだけど。

平田氏 / それは知りませんでした。

代表 / トータル性という意味ではペパーもどうなのかはちと疑問です。

代表 / 出来たアルバムに「これはコンセプトアルバムです」と云っただけって節もある。

平田氏 / 無理矢理、ロンリーハーツクラブバンドでまとめたって感じもしますよね。

代表 / うん。最初と「リブリーズ」があったから納得できるようなもので。

平田氏 / 全く同感です。

平田氏 / でもよくあんなにいい曲が揃ったものですね。ルーシー・イン・ザ・スカイ・・・・のL・S・Dにはうならされたものでした。

代表 / 本人は否定してるけどホントはどうなんだか。

### サイケとトータル性

代表 / 話が矛盾してるみたいだけど、サイケとトータル性で相容れないものじゃありません？

平田氏 / 僕は、3分サイケソングに多大な魅力を感じています。ペパーの場合はトータルというのは単なるアイデアでしかないのでは。結局曲が良いから名盤なのだと思います。

代表 / それはもちろん。ペパーはたまたま良い曲が集まってそれに意味づけをしたと・・・

平田氏 / サイケ=トータルのイメージは音楽史にあくまでペパーの影響が強烈にあるからなのは。それと、ペパーフォロワーのせいと。

代表 / コンセプトありきで成功したのはフーの「トミー」位なのかな。ポップバンドとしては。

代表 / あとキンクスの一連の作品か。売れなかったみたいだけど。

平田氏 / あれば舞台用だったんですよ。

代表 / そうです。

平田氏 / ロックオペラでしたっけ。

代表 / そう。

平田氏 / でも、曲としても粒ぞろいですよ。

代表 / うん。でもサイケのという時代の気分から出たコンセプトアルバムって考えがオペラに行き着いたってのは何となく面白い。

### プログレ、ハードロック、ロックヒーロー

平田氏 / フーでいえば、ハードロックへの過度期でしたしね。後に トータル性 が結実したので

しょうね。

代表 / 一方でクリムゾン1stみたいな形でプログレロックの方向性を築いた。

平田氏 / そうですね。イギリスサイケバンドってハードロック志向とプログレ志向になりますよね。

代表 / ハードロック志向ではどんなものが？

平田氏 / 明確に言えば、60年代イギリスバンドがサイケを経た後にどうなるかってことなんです。

代表 / うん。そういった意味ではプリティシングスもいい例ですな。

平田氏 / さっきのフーはそうですし、ヤードバズもそうですよ。あと、スティープマリオットも、ピーターフランプトンも。

平田氏 / ちょっとサイケ時代でも硬派だったバンドはそうなくなっていきような気がします。フロイドが軟派ってわけではないですが(笑)

上手いギタリストがハードロックに走ったのではないかと。例外は多いですがね。

代表 / これまた面白いテーマで・・・サイケポップバンドは下手であるべきってのがなんとなくあります。

平田氏 / それはあると思います。下手な方がスリリングですよ。

平田氏 / B級サイケ・ガレージバンドってのは本当に危ないです。

代表 / 曲のアイデアがあって、それを何とか表現しよう、でも上手く弾けない。そんで出てきたものがスリリングだったりする。

平田氏 / アイデア先行の時代だったんですよ。66~70くらいは。

代表 / でも曲自体が良いものじゃなきゃ仕方なし。そのバランスが難しい。

平田氏 / そうですね。

平田氏 / いいサイケ曲ってのはポップソングとしても絶品だと思います。

代表 / 上手く弾けるヤツがハードロック行ったり、プログレになったりってことなんか。

平田氏 / そうなんですよ。

代表 / ビートルズだって一人一人が優れたミュージシャンかっていったらそうでもないわけで。曲に盛り込んだアイデアが絶品だったってことですよ。

平田氏 / 本当に、個々のミュージシャンがクローズアップされ出すのは70年代以降の現象ではないかと。

平田氏 / 60年代はそれらが出世していく混沌とした時代だったのでは。

代表 / うん。フロイドも一応プログレに分類されているけど。別に演奏者としてはたいしたことではない。

平田氏 / 60年代はバンドの時代。70年代はアーティストの時代ってことになりませんか？

平田氏 / 70年代以降に活躍するアーティストは皆、60年代にはパツとしないメンバーを引き連れたバンドから出てきてますしね。

代表 / 確かに。60年代も3大ギタリストってのがあったけど。70年代はその辺がより顕著になった感じはありますな。

平田氏 / そうですよ。ロックヒーローの誕生は70年代ってことですね。

代表 / それがよかったんか悪かったんかはわからないけど(笑)

平田氏 / 僕は悪かったのではないかと。オヤジロックファンを形成しちゃいましたからね(笑)

代表 / それは例えば?

平田氏 / 和田誠!

代表 / ???

平田氏 / 話が面白くない(笑)

代表 / ???

平田氏 / もしかして関西ローカルネタかも。

代表 / わかんないっす(笑)

平田氏 / 是非、KBS 京都 TV をご覧ください。

代表 / 見れないって(笑)!!

(98.10.17.)

遁生レコード通信第5号

発行 / 98.10.25. 不定期刊

発行者 / 遁生レコード

352-0002 新座市東1-12-18(アダチ)

kakou@t3.rim.or.jp

Text. ・The World Of TONSEI RECORDS

・メールマガジン「遁レコ通信」

(<http://www.t3.rim.or.jp/~kakou/index.htm>)

文章の無断転載を禁じます。